

[ 論文 ]

## あるロシア系収容者のミュンヘン難民キャンプ

—— 米ソ対立のはじまりと「置き場のない人々」 ——

井上 岳彦、斎藤 祥平

## はじめに

1945年1月中旬になると、ベルリンの空襲も激しくなった。・・・(中略)・・・私たちの列車は、イエーナ、ニュルンベルクを通過して、ミュンヘン東駅に着いた。最初にバイエルン州ショーンガウの難民収容所、そのあとホーエンフルヒという小さな町の収容所に移動した。そこには小さな収容所がすでにたくさんあった。IROによる施設だった<sup>(1)</sup>。・・・(中略)・・・45年2月から4月に、戦闘機が収容所周辺に時々飛来することがあったが、空襲に遭うことはなかった。しかし食べ物にはなかった。45年5月に解放されるとすぐに、フランス人とオランダ人は帰国した。イタリア人は残った。収容所にはセルビア人、ブルガリア人、カルムイク人がいた。・・・(中略)・・・バイエルン州はアメリカ占領地区に入った。アメリカ軍はたくさん食べ物をくれた。私たちは、ミュンヘンの北にあるフライマンの収容所に移された<sup>(2)</sup>。

以上は、カルムイク系の亡命ロシア人二世<sup>(3)</sup>であるエレナ・シュルーター（1931年ベルギー生まれ）による回想の一部である。一時的に滞在していたベルリンで空襲に遭い、ミュンヘンの難民キャンプに逃れたことについて述べている。当時、彼女は14歳で、ナン

(1) 戦争によって行き場を失った人々の救済に関しては、当初は連合国救済復興機関(United Nations Relief and Rehabilitation Administration、以下、UNRRA)の管轄となった。1947年7月に管轄がUNRRAから国際難民機関(International Refugee Organization、以下、IRO)に移行された。この経緯からすると、当時はIROではなく、UNRRAであったはずだが、ここではエレナの証言をそのまま記すことにする。

(2) エレナ・シュルーターのインタビュー。省略のない内容については、2-5の資料(E)を参照。

(3) カルムイク人は西モンゴル諸族(オイラト)のひとつで、現在のロシア連邦カルムイク共和国における主要構成民族である。17世紀以来、カスピ海と黒海のあいだの草原地帯に居住し、現在、ロシア以外にも、カザフスタン、キルギス、アメリカ等に散らばる。ロシア革命・内戦の結果、一部のカルムイク人は、その他の旧ロシア帝国臣民とともに、ヨーロッパに亡命することになった。その亡命の経緯については、本稿第2節で詳述する。また、亡命カルムイク人について、特に優れた先行研究として以下のものがある。荒井幸康『『三度で最後の大陸』にいたるまで：カルムイク・ディアスポラの400年』白杵陽監修、赤尾光春、早尾貴紀編著『ディアスポラから世界を読む：離散を架橋するために』明石書店、2009年、114-130頁、446-450頁；*Эльза Гучинова, Улица “Kalmuk Road”: история, культура и идентичности в калмыцкой общине США. Санкт-Петербург, АЛЕТЕЙЯ, 2004.*

セン・パスポート<sup>(4)</sup>を所持する無国籍者だった。エレナ・シュルターからの聞き取りは、2017年2月24日にミュンヘン市内のカフェで、2月26日に彼女の自宅でおこなった。彼女の語りは、亡命カルムイク人二世としてだけでなく、旧ロシア帝国臣民亡命者の生活状況や第二次世界大戦前後の難民収容所の様子も今に伝えるもので、極めて貴重である。また、アメリカ亡命後のことや西ドイツでの勤務など、今後さらに彼女から得られる証言や、彼女が個人で所蔵する資料にも研究上の期待が集まる。

第二次世界大戦は、それ以前とは比較にならないほど多くの難民を生んだ。1941年、連合国側はそれらの難民やその他戦争被害者の保護・支援を行うために、連合国救済復興機関(UNRRA)を設立した。しかし、同機関は冷戦の緊張が高まる中、アメリカを中心とする西側諸国がソ連の影響力を嫌ったため十分に機能せず、1947年にその役目を終えた。UNRRA閉鎖以後、難民の保護事業は、1948年に設立された国際難民機関(IRO)へと引き継がれた。しかし、IROも欧米主導で設立されており、その保護対象もUNRRAから引き継ぎ、ナチスによる犠牲者、あるいは東欧から西側へ脱出した難民のみに限られていた<sup>(5)</sup>。

国家の枠組みから外部化された難民と移民は表裏一体の関係にあり、シティズンシップの包摂と排除の論理を前に危機にさらされつづけてきた。「難民」の恒久的解決策としては、難民の自主的帰還(Voluntary Repatriation)、第三国定住(Resettlement)、ホスト国が国民として受け入れる(Reintegration)という三つがある<sup>(6)</sup>。現代においても、このいずれも実現できず、多くの人々が困難に直面している。従来の移民研究は、移民の定住先への一方向的な移動が強調されてきた。これは、特にヨーロッパからアメリカに渡る場合に代表される。しかし、今日においては、国家間での循環や帰還によって、空間的に散在する集団間

(4) ナンセン・パスポートは、ロシア革命によって大量に生まれた難民を保護するため、難民が国境を越えられるよう発行された難民身分証のことを言う。第一次世界大戦後に発足した国際連盟は、ノルウェー人探検家でノルウェー駐英大使も務めたフリチョフ・ナンセンを難民高等弁務官として任命した。その名に由来するナンセン・パスポートは、1922年から国際的な合意にもとづき発行された。彼の死後、ロシア難民保護に関する業務は、ナンセン国際難民事務所に引き継がれた。1930年代には、ナチスの台頭に伴いドイツから大量のユダヤ人が流出、彼らの保護を目的としたドイツ難民高等弁務官が1933年に設置された。さらに、1939年には、ナンセン国際難民事務所とドイツ難民高等弁務官の機能は、国際連盟難民高等弁務官へと統合された。川村真理『難民の国際的保護』現代人文社、2003年；堀江正伸「難民救済機関としてのUNHCR」滝澤三郎、山田満編著『難民を知るための基礎知識：政治と人権の葛藤を越えて』明石書店、2017年、91-99頁。

(5) 川村『難民の国際的保護』；堀江正伸「難民救済機関としてのUNHCR」、91-99頁。

(6) さらに「国民という資格を決める法制度の狭間に落ちた人々」として、無国籍者の存在がある。錦田愛子編『移民／難民のシティズンシップ』有信堂高文社、2016年、4-6頁。1954年の「無国籍者の地位に関する条約」第1条1項では、「『無国籍者』とは、その国の法律の適用によりいずれの国によっても国民と認められない者をいう」と規定される。付月「無国籍条約加入の意義と日本の課題」『移民政策研究』第5号、2013年、34-50頁。また、日下部尚徳、石川和雅編著『ロヒンギャ問題とは何か』明石書店、2019年によれば、「国際社会が国家を単位として成り立っている以上、いずれの国も法的に所属しない無国籍者は、いずれの国からも排除され、どの国からも保護されない可能性がある」(232-233頁)。

での社会ネットワークが形成されていることに注目が集まる<sup>(7)</sup>。本稿で検証するインタビュー対象は、ロシア革命・内戦の結果として生み出された難民であり、就業や教育機会を求め欧州各地を流浪し、第二次世界大戦の結果として再び難民になる。さらに、ドイツからアメリカへの移住の後に、再びドイツへ帰還した事例であり、自己定義の形成という点でも、民族的出自や移動前の難民として置かれていた環境による特殊性が浮かび上がる点で、近年の研究動向にひとつのケーススタディを提供するものと言えよう。

「Displaced Persons (DPs)」(以後、本文中で「DPs」と表記する)については、1944年頃にはすでに連合軍遠征軍最高司令部(SHAEF)によって対応が計画され、第二次世界大戦の結果として「出身国」の外側で発見され、出身国に戻ることが望ましいがそれができない人々、ないし援助なしに出身国を見つけられない人々、さらには敵国や旧敵国に帰ることになってしまう人々と定義された<sup>(8)</sup>。ここには、連合国救済復興機関(UNRRA)による難民再定住計画の限界が示されており、今日に至るまで課題であり続けている問題群の原点を我々に教示している。アンナ・ホリアンによれば、戦争直後にヨーロッパで行き場を失った人々は1100万人にも上った。その内およそ8割がドイツにいた。そこには、600万人の外国人労働者、200万人の捕虜、70万人の強制収容所からの生存者が含まれていた。戦争終結直後に、多くのDPsは快く帰国していった。初期の帰還のペースは速く、1945年の夏から初秋にかけて、一日あたり3万3000人のDPsを送還したと言われる。その結果として、9月の末までにドイツのDPsの数は120万人まで減少した。だが、東ヨーロッパ出身の人々の多くは、祖国の新しい政治体制や帰国後の自身の処遇を不安視したために、帰還に前向きではない、もしくは帰還に反対している状態にあった。彼らは「本国に送還できない(nonrepatriable) DPs」と呼ばれた<sup>(9)</sup>。

こうしたアメリカを中心とする陣営の事情を踏まえれば、彼ら(本国に送還できない

(7) アレクサンダー・C. ディーナー、ジョシュア・ヘーガン著、川久保文紀訳、岩下明裕解説『境界から世界を見る：ボーダースタディーズ入門』岩波書店、2015年、118-119頁。境界を越える人びとの移動に関して、社会学や人類学などではトランスナショナリズム研究という研究領域が活発化しているが、この方法論や視角によって、単一の国民アイデンティティの中で複数のアイデンティティを有するのではなく、少なくとも2つ以上のアイデンティティを超えるような存在が指摘され、そうした存在者にはコスモポリタンの志向が観察される場合もあるという。西原和久「越境する実践としてのトランスナショナリズム：多文化主義をこえるコスモポリタニズムと間文化主義への問い」『グローバル研究』第2号、2015年、1-4頁。

(8) Anna Holian, *Between National Socialism and Soviet Communism: Displaced Persons in Postwar Germany* (Ann Arbor: The University of Michigan Press, 2015), p.43. その後の法律上の定義については、*Legislative History of the Displaced Persons Act of 1948*: P.L. 80-774: 62 Stat. 1009: Ch. 647, 2d Sess.: June 25, 1948. Washington: Covington & Burlingを参照。DPsのアメリカへの受け入れについて1952年までの経緯は、次の文献が詳しい。*The DP story: the final report of the United States Displaced Persons Commission* (Washington: Government Printing Office, 1952).

(9) Holian, *Between National Socialism and Soviet Communism*, p. 3. ホリアンは、Eugene Kulischer, *Europe on the Move: War and Population Changes, 1917-1947* (New York: Columbia University Press, 1948); Wolfgang Jacobmeyer, *Vom Zwangsarbeiter zum Heimatlosen Ausländer: Die Displaced Persons in Westdeutschland, 1945-1951* (Göttingen:

DPs)を「置き場のない人々」と訳すことができるかもしれない。一方、ソ連側はこうした人々の帰還を要求しており、ソ連側の視点からは彼らが置かれるべきは、ソ連や東欧といった元々の出身地ということになる。翻ってアメリカ側は、人権の保護の観点から彼らを留めていたという可能性もあるが、「置き場のない人々」の存在と彼らへの人道支援をアピールし、ソ連や東欧の体制への批判に利用した可能性もあり、「置き場のない人々」とは政治的に創出されたとも考えることができる<sup>(10)</sup>。

しかし、そこには、彼ら自身の意思に関する検討は十分になされていない。これまで、Displaced Personsについては、民族別の動向であったり、特定のグループのDPsに関する研究、および彼らと特定の組織との関係であったり、個別に進められてきた。また、ヨーロッパ史やドイツ史の文脈、すなわちナチス・ドイツと第二次世界大戦との関係の中に位置付ける試みのなかで、ユダヤ系を中心として民族集団ごとの研究が進められてきた<sup>(11)</sup>。また、亡命ロシア人に関するディアスポラ研究の観点では、荒井幸康がアジア、ヨーロッパ、アメリカを横断し、「それぞれが自分の居場所を維持しつつ連携し合う」、カルムイク人の「ディアスポラのネットワーク」<sup>(12)</sup>の存在を指摘したように、「国民国家的な馴化」<sup>(13)</sup>に

Vandenhoeck und Ruprecht, 1985); Ulrich Herbert, Arbeit, Volkstum, Weltanschauung: über Fremde und Deutsche im 20. Jahrhundert (Frankfurt am Main: Fischer Taschenbuch Verlag, 1995)の戦中・戦後のドイツを中心とした人の移動に関する研究に基づき、具体的な数字を挙げている。また、畑中幸子は、「ヨーロッパにおいて100万人以上の戦争難民が4年半の間に113カ国に移住した。1951年にヨーロッパ人移住のための政府間委員会が設立され、ヨーロッパ人移民の移住を支援した。1953年にアメリカは向こう4年間にさらに18万5,000人余りのDPの移住を認めた。結局、アメリカはDP条例(Act)の下で40万人近い人びとを受け入れた」(44頁)と指摘する。さらに、「第二次世界大戦のヨーロッパ難民の問題はヨーロッパで、またはヨーロッパ人移民国での受入れて円滑に解決された」(46頁)と述べる。畑中幸子「ヨーロッパの難民1945-1951:バルト三国の“Displaced Persons”」『国際研究』第14号、1998年、23-47頁。これに対し、本稿は、後述するように、個々の収容者の置かれた状況は複雑であり、少なくともカルムイク人の移住が一筋縄ではいかなかったことを示すものである。なお、畑中も、キャンプ・コミュニティの文化的・教育的意義を強調している点で、本稿のインタビューと共通性を持つ。

(10) Holian, *Between National Socialism and Soviet Communism*, pp. 42-44. ホリアンの研究に先立ち、ワイマンはDPsに関する網羅的かつ詳細な単著を上梓し、難民キャンプ収容者の文化的多様性に着目した点で先駆的である。ただし、民族グループとしてのロシア人については、一部のロシア人のソ連との関係が強調される一方で、異国への移住を果たしたロシア人による共産主義やソ連への懐疑的態度が紹介されるが、その多様な立場については限定的な扱いに留まっている。Mark Wyman, *DPs: Europe's Displaced Persons, 1945-1951* (Ithaca: Cornell University Press, 1998), pp.130, 208.

(11) ここには戦後ドイツについて扱うものも含まれ、一部はポーランドにおけるユダヤ人について論じる研究も活発化しているほか、ポーランド系、ウクライナ系など民族別の研究成果も出始めており、本稿をこうした研究の流れに位置付けることもできよう。とはいえ、これらの研究の多くは、キャンプやコミュニティでの状況、および、政府とその関連機関の政策やNGO組織等の対応など、集団として論じられることが多かった。Holian, *Between National Socialism and Soviet Communism.*, p. 7, 20.

(12) 荒井『『三度で最後の大陸』にいたるまで』、129頁。

(13) 白杵陽「序論『方法としてのディアスポラ』の可能性」白杵陽監修、赤尾光春、早尾貴紀編著『ディアスポラから世界を読む：離散を架橋するために』明石書店、2009年、25頁。

抵抗し超越するものとして位置づけられる。沼野充義は「ディアスポラという言葉が、移住者たちの祖国と過去の災厄を振り返るだけでなく、彼らが『蒔き散らされた』先での新たな生の繁栄の可能性も視野に入れるための用語になった」とし、「ディアスポラがどこからやってきたかだけでなく、どこに行ったのか、そしてどこに向かいつつあるのか、を含めて全体像を描き出すこと」<sup>(14)</sup>の重要性を述べる。

本稿のインタビュー対象者は、ベルギー生まれの亡命二世であり、母を失い、父とも離れ、教育機会を求めてヨーロッパを転々とした。彼女にとって、ロシアやソ連、あるいはドイツは「故郷」でもなく、彼女自身がどこからか「追放」された訳でもなく、しかも、それまでの間は、行き先がないだけでなく、その立場も非常に不明瞭であった。本稿は、第二次世界大戦前後の亡命ロシア人を取り巻く状況を加味しながら、エレナ・シュルターという、カルムイク系亡命ロシア人二世の個人の語り(あるいは、語られないもの)を手掛かりに、「置き場のない人々」を主体的な存在として捉えなおし難民個々人の生のあり方を掘り起こすことで、新たな視角から在外ロシア人研究に貢献しようとする試みである。

## 1. ミュンヘン：「置き場のない人々」創出の場

第二次世界大戦は、それまでの亡命ロシア社会の相貌を激変させた<sup>(15)</sup>。特に、本稿で検証するインタビュー対象者エレナ・シュルターの語りを理解する上で、第二次世界大戦前後のドイツ、とりわけミュンヘンにて亡命ロシア人がおかれていた歴史的な脈を踏まえておく必要がある。

1917年のロシア革命と続く内戦に起因する亡命(第一波、第一次亡命)に関しては、ベルリンがドイツでの主要な受け入れ先であり、これまでもベルリンについての研究が入念に進められてきた<sup>(16)</sup>。他方、ミュンヘンについては、君主主義者などの右派が勢力を伸ばしていたことが知られ、「再建」(Aufbau)という政治結社がミュンヘンに移住する亡命ロ

(14) 沼野充義「総論 ディアスポラ論」塩川伸明、小松久男、沼野充義編『ユーラシア世界2 ディアスポラ論』東京大学出版会、2012年、6-7頁。

(15) とりわけ、ドイツやドイツの戦争に影響を受けたチェコスロヴァキアにおける亡命ロシア人についての研究書の多くが、戦前ないしは戦争直前を主たる研究対象としている。そのことを踏まえれば、戦中の亡命ロシア社会について解明が待たれている。戦前ないし戦争直前の亡命ロシア社会に関する研究書の例として、Robert C. Williams, *Culture in Exile: Russian Emigrés in Germany, 1881-1941* (Ithaca, N.Y.: Cornell University Press, 1972); Elena Chinyeva, *Russians outside Russia: The Émigré Community in Czechoslovakia 1918-1938* (München: R. Oldenbourg, 2001); Catherine Andreyev and Ivan Savický, *Russia Abroad: Prague and Russian Diaspora, 1918-1938* (New Haven: Yale University Press, 2004)。

(16) Журавлев В.В., отв. ред., *Общественная мысль Русского зарубежья: энциклопедия*. Москва: РОССПЭН, 2009, С. 29-33; 諫早勇一『ロシア人たちのベルリン：革命と大量亡命の時代』東洋書店、2014年、21-22頁。広く独ソ関係について扱った論集として、Karl Schlögel, ed., *Russian-German Special Relations in the Twentieth Century: A Closed Chapter?* (Oxford: Berg, 2006)がある。

シア人の選別や統合を行っていたとされる<sup>(17)</sup>。なかでも極右派はナチスの台頭とともにドイツ当局と連携するようになったが、その右派の諸潮流に亀裂をもたらしたのが、第二次世界大戦の東部戦線(いわゆる「独ソ戦」)であった。ソ連を滅ぼし「本来の」ロシアを取り戻してくれるとヒトラーに期待する者、祖国ロシアを守るためにスターリンを支持する者など、亡命ロシア人の立場はさらに多様化した<sup>(18)</sup>。この第二次世界大戦中とその直後に、亡命の第二波(第二次亡命)、すなわち東部戦線の戦場となった地域のソ連市民が難民となりミュンヘンに流入し、第一波の亡命ロシア人と合流することになった。エレナが過ごしたミュンヘンという場は、まさに亡命ロシアの交差点であったとも言える。本稿は、こうした「ナチス後」のミュンヘンが、ロシアからの亡命者やソ連からの難民の境遇にどのような影響を与えたのかをエレナの語りから紐解いていきたい。

ホリアンによれば、東欧出身者(ポーランド人、ウクライナ人、ユダヤ人、ロシア人など)は本国に送還できないDPsになる割合が高く、彼らは時間とともにドイツ南東地域、すなわちアメリカ占領地区に集まった。それに対し、ソ連政府はドイツにおける全ての外国人の帰還を主張していたため、ソ連占領地区では「DP問題(DP Problem)」そのものが存在し得なかったことが指摘される<sup>(19)</sup>。つまり、彼らは厳密には帰国できなかった人々ではなく、何らかの理由を持ち、それをもとに帰国しなかった人々でもある。また、ソ連側から見れば、彼らは出身地であるソ連や東欧に本来は「置かれるべき」人々であるということになる。

エレナはこうした人々の中の一人であり、本稿では彼女の経験や語りを持つ特徴を浮き彫りにする。結果的に彼女はロシアへの「帰還」でもなく、ドイツでの定住でもなく、アメリカへの移住を当時は選択したが、彼女がそこに至った経緯を当時のミュンヘンという場の状況から考察することも不可欠である。

前述のように、第二次世界大戦期のロシア人のDPsは、ウクライナ人らと同様に、古い亡命者(第一波)と新しい亡命者(第二波)の混合であった。前者はロシア革命と内戦からの亡命者であり、後者の多くはソ連の市民であり、そこには、民族的にロシア人と自認している人々に加え、ロシア文化を自らと「同一視」するウクライナ人、ベラルーシ人、コサックも含まれていた。戦争直後には、ロシア人のDPsはソ連市民が数的に圧倒していたが、

---

(17) Michael Kellogg, *The Russian Roots of Nazism: White Émigrés and the Making of National Socialism, 1917–1945* (Cambridge: Cambridge University Press, 2005), pp. 151, 154–155. 一方、ミュンヘンには様々な形でロシア文化が育まれていたという側面もある。ミュンヘンを中心として、バイエルン地方に所縁のあるロシア人の回想や彼らの人物伝として、*Tat'jana E. Lukina* (Hrsg.), *Russische Spuren in Bayern: Porträts, Geschichten, Erinnerungen* (München: MIR, Zentrum Russischer Kultur in München, 1997)がある。

(18) 諫早、前掲『ロシア人たちのベルリン』、40、243–251頁。また、満洲国の亡命ロシア人の中には独ソ戦を受けて親ソへと転じた者も多かったという。中嶋毅「ある亡命ロシア人の反省：『ハルビン・フォンド』にみる満白系ロシア人の世界」中嶋毅編『新史料で読むロシア史』山川出版社、2013年、169頁。

(19) Holian, *Between National Socialism and Soviet Communism*, p. 3.

次第にソ連への帰還が進み、古い亡命者の割合が増大したという<sup>(20)</sup>。しかし、戦争中・戦後の混乱期に、様々な立場・出自のロシアに所縁のある人々が「置き場のない人々」に入り混ざっていたというのが実情であった。その例として、エレーナは、亡命第一波のカルムイク系コサック(カザーク)を父とし、ベルギーで生まれた第二世代である。後述するように、エレーナは難民キャンプで長い時間を過ごし、その期間を「青春時代」として回顧しており、ロシア人DPsの多様性を示している。

こうした戦争によって行き場を失った人々の救済に関しては、先に述べたようにUNRRAやIROが担ったが、この展開にソ連と東側陣営は反発し、IROに加入しなかった<sup>(21)</sup>。DPsの存在認否そのものが東西対立の一つの現れとなったことの証左である。対照的に、敗戦国ドイツのアメリカ占領地区はDPs政策において、最も手厚い場所であった。DPsの共産主義と反ユダヤ主義に対する恐怖心にアメリカは同情的に対応したため、アメリカ占領地区はDPsにとっての「天国」だと広く認識された。自由主義・民主主義の理念のもと、西側占領区でも最も豊富な物質的支援がなされ、難民たちにも主体的な発言者としての役割が与えられ、キャンプ内に各種委員会などが設置された<sup>(22)</sup>。このことは、アメリカ占領地区であるミュンヘンの難民キャンプに収容されたエレーナの回想と重なるところも多い。

そうしたアメリカ側による寛容な姿勢や恵まれた環境は、DPsが祖国への帰還に反対するため条件を与えた。加えて、アメリカ占領地区は、DPs集団内部に帰還するか否かという議論の余地を与え、彼らが帰還以外の代案について活発に議論する場となった<sup>(23)</sup>。

### 1.1 新旧亡命ロシア人の運動と「民族の牢獄」への抵抗

戦間期の亡命ロシア人による政治運動は対立や分裂を繰り返し、ポリシェヴィキに反対はしても、どのように権力を獲得し、何がそれに代わるのかという点で一致せずにいた。ナチス・ドイツは、ロシア内戦以降でポリシェヴィキに挑戦する最初の強大な勢力であったため、ドイツに協力した亡命ロシア人も多く、ドイツがソ連に宣戦布告したことは、亡命ロシア人の間の抗争が表面上は解決したかに見えた。しかし、戦争が終わると、様々な

(20) Ibid., pp. 40–42.

(21) Ibid., p. 42, 45.

(22) Ibid., p. 55; Wyman, *DPs: Europe's Displaced Persons, 1945-1951*, pp. 106-130; 畑中「ヨーロッパの難民1945–1951」、35–36頁。

(23) 祖国への帰還を拒否する理由について、ポーランド人らは祖国ポーランドがロシア人に占拠され、共産主義に支配されているとし、ウクライナ人はロシア人とポーランド人による祖国の占拠に反対しつつ、独立ウクライナの希望し、ロシア人はソ連を「非ロシア的」ポリシェヴィキが独裁を行い、ロシア人を迫害していると主張した。こうした民族対立を基盤とした政治的理由に加え、ドイツ人や他の難民との現地での結婚、疾患など、帰国しない個人的な理由を持つ人もいた。彼らは、ドイツの国家社会主義の被害者であるよりもむしろ、ソ連を中心とする共産主義から逃れた人々であるという自己認識を持っていた。Holian, *Between National Socialism and Soviet Communism*, pp. 81–82, 85.

政治グループが難民キャンプに再び現れて競い合うようになった。さらに、ソ連からの難民も運動の重要な構成者となり、路線対立を複雑化させた。

ソ連軍将軍のアンドレイ・A・ヴラソフ(1901-1946)の活動に感化された亡命ロシア人の運動も、その一つだ<sup>(24)</sup>。「ロシア諸民族解放運動反共産主義センター」(Антикоммунистический Центр освободительного движения народов России, АЦОНДР)は、ソ連への帰還に反対しただけでなく、新しいロシアを創造するための亡命政治運動にソ連から逃れてきた人々を参加させ、難民キャンプで様々な議論を展開させる役割を担った<sup>(25)</sup>。この組織はミュンヘンの北部に位置するオーバーシュライスハイム地区に存在したシュライスハイム(Schleissheim)難民キャンプを拠点とした<sup>(26)</sup>。

つまり、亡命ロシア人の活動は、第二次世界大戦という突如押し寄せた荒波によって打ち消されるのではなく、むしろ勢いづき、とりわけドイツ・バイエルン州で再浮上したと捉えることも可能だ。第二次世界大戦中・戦後に逃れてきた亡命第二波にあたる人々は、ソ連が独裁的体制で、恐怖政治を行っているという認識を共有しつつも、そのソ連体制を弱体化させる方法や管理された計画経済に代わる経済システムの構想などの点では、意見の一致をみなかった。中でも、最も意見が分裂したのは、民族問題であり、ロシア人を中心とし、ソ連を連邦制の民主的ロシアに変えることを望んだグループと、ウクライナ人によって支持され、ソ連を「民族の牢獄」とみなし、ソ連をそれぞれ独立した民族国家の共同体に置き換えることを望んだグループが存在した<sup>(27)</sup>。

全体としては少数派ではあったものの、分離主義的なグループが活発であったのはバイエルン州であり、その多くはミュンヘンを拠点していた。最も有力な組織としては、ウクライナ民族主義者ステパン・A・バンデラ(1909-1959)の協力者ヤロスラフ・S・ステツコ(1912-1986)が1946年4月に創設した「反ボリシェヴィキ諸民族ブロック」(Антибільшовицький блок народів, АБН)が挙げられる<sup>(28)</sup>。彼らはソ連内での政治的抑圧、

(24) ヴラソフは、「独ソ戦」の最中の1942年7月にドイツ軍に投降すると、スターリンを打倒する運動を支持し、ドイツ国防軍と協力してロシア人の委員会を創設した。「ロシア諸民族解放委員会」(Комитет освобождения народов России, КОНР)、及び「ロシア解放軍」(Русская освободительная армия, РОА)をブラハで組織した。ヴラソフらはその後、ドイツ軍とも異なる独自の行動をとり、チェコスロヴァキア解放後にはアメリカへの亡命を希望するも、結局はソ連に引き渡され、モスクワで処刑された。Ibid., pp. 114-115.; Wyman, *DPs: Europe's Displaced Persons, 1945-1951*, pp. 35-36; Johannes D. Enstad, *Soviet Russians under Nazi occupation: fragile loyalties in World War II* (Cambridge: Cambridge University Press, 2018), pp. 204-206.

(25) Holian, *Between National Socialism and Soviet Communism*, pp. 115-116.

(26) ロシア人を中心とするこの組織の志向はやはり連邦主義であり、概して、ロシア人以外の民族から支持を獲得することは難しかったものの、一部のウクライナ人、ベラルーシ人、コサック、カルムイク人といった非ロシア人の支持もあったという。Ibid., pp. 124-125.

(27) Ibid., p. 121.

(28) Ibid., p. 126. ウクライナ・パルチザン軍の、とりわけ戦前・戦中の活動についての詳細は、中井和夫『ソヴェト民族政策史』御茶の水書房、1998年、356-357頁。



粛清、強制収容所、民族の強制移住などを批判したが、とりわけ、それらをロシア帝国主義の新たな形式とみなし、糾弾した<sup>(29)</sup>。1949年4月10日、ミュンヘンで難民たちによる最大のデモが行われた。ここでは反共産主義のテーマが掲げられ、ソ連による宗教抑圧などへの批判が展開された<sup>(30)</sup>。多くの難民は特定の政治組織には所属していなかったが、このデモには最大で1万人の難民が参加したという<sup>(31)</sup>。現地警察やアメリカ軍との衝突も発生し、難民がドイツを離れるきっかけとなった。こうして、1950年代半ばからソ連系難民による反共産主義運動の舞台は、移住の進展に伴い、収容先のドイツから移住先のアメリカ、カナダ、イギリス、オーストラリアなどへと移っていった。

## 1.2 冷戦の始まりと「置き場のない人々」

戦争からの時間の経過に伴い、敗戦国であるドイツ社会の中でもDPは「行き場のない人々」から「置き場のない人々」へと位置付けられるようになった。ドイツの共産主義者らはこれらの難民を共産主義からの難民であり、罪を逃れた戦争犯罪者であると考え、亡命ロシア人の一部がナチスと協力していたことに対して批判的であった。また、戦争による難民の支援は国が背負うべきではないとするドイツ国内の世論もあった<sup>(32)</sup>。

さらに、次々と作られていった彼らの組織が、当初はアメリカの占領権力に疑われ警戒されるも、米ソの緊張が高まる中で、次第に政治的に利用されていった側面も見逃せない<sup>(33)</sup>。例えば、アブドゥラフマン・アフトルハノフ(1908–1997)は、チェチェン出身で1940年頃からソ連に対する蜂起を展開していたが、「独ソ戦」の最中にナチス・ドイツ側と交渉し、ナチス側に採用された。1943年に彼はベルリンに移り、ロシア語の出版物などでコーカサス問題についての宣伝活動を行った。終戦を前に彼はアメリカ占領地に移動し、終戦後もしばらく難民収容所で過ごす。ここでは東欧やバルカンから逃れてきた亡命ロシア人サークルやアメリカ政府系の刊行物において、反ボリシェヴィキの主張を行った<sup>(34)</sup>。ドイツは戦中からソ連内部の分離運動を戦争に利用しようとしていたが、アフトルハノフのソ連に関する情報は戦後において西側で重宝されることになる。1948年よりドイツ駐留アメリカ軍のロシア部門において、ソ連についての講義を行うなどし、1951年には、彼は

(29) Holian, *Between National Socialism and Soviet Communism*, p. 128.

(30) *Ibid.*, p. 140.

(31) *Ibid.*, p. 146.

(32) *Ibid.*, pp. 139–140.

(33) *Ibid.*, p. 121.

(34) Журавлев, *Общественная мысль Русского зарубежья*, С. 165–166. アフトルハノフ(Авторханов, Абдурахман Гензавич)はいくつかの筆名を持ち、以下の文献(p. 11)のKunta Abdurachmanもそのひとつである。彼はソ連ムスリム亡命者の指導者の一人でもあった。Charles O'Connell, "The Munich Institute for the Study of the USSR: Origin and Social Composition" in *The Carl Beck Papers in Russian and East European Studies* (University of Pittsburgh Center for Russian and East European Studies, 1990).

ミュンヘンにてラジオ・フリー・ヨーロッパの共同設立者となった<sup>(35)</sup>。このラジオ局は、アメリカの出資により東欧諸国に向けて情報提供およびプロパガンダを行うものであり、本稿のインタビュー対象者エレナが働いていた場所でもある。

また、彼はミュンヘンに創設されたソ連研究所(Institut zur Erforschung der UdSSR)の研究者でもあった<sup>(36)</sup>。同研究所は、こうしたソ連からの難民や捕虜、亡命ロシア人をスタッフとして抜擢し、1950年から1971年にかけて、ミュンヘンにありながら、学会、出版、サマースクールを通じて、アメリカやイギリスのソ連研究の重要なコミュニティの一部を構成していた<sup>(37)</sup>。例えば、1950年から1951年にかけて行われた難民インタビュー・プロジェクト(ハーバード大学)においても重要な役割を果たした。同研究所は、「私的なボランティア団体」とされていたラジオ・リバティ委員会を隠れ蓑に資金を得ていたが、実際にはCIAから実質的な資金援助を受けており、そのことから同研究所の政治性を窺い知ることができる<sup>(38)</sup>。研究所の目的は、「ソ連の国家と社会のあらゆる側面について研究すること」にあった<sup>(39)</sup>。

ラジオ・フリー・ヨーロッパと類似の組織として、ミュンヘンに1953年に設立されたのがラジオ・リバティであった。ラジオ・リバティは、対ソ連プロパガンダのためにアメリカCIAによって運営され、多くの亡命者や元ソ連関係者を採用した<sup>(40)</sup>。「独ソ戦」の中でドイツの捕虜となったソ連兵などが、難民キャンプなどで西側の組織と接触し、さらには冷戦の始まりと共に抜擢され、新たな活躍の場所を与えられたケースも少なくなかった。

このように、アメリカ占領地区ミュンヘンは一部の難民活動家にとって恵まれた環境であった。というのは、東西対立の深化の中で、反共産主義がアメリカの対独外交政策の中心になるとともに、共産主義に反対する難民はサポートを受けることができるようになった。彼らの主張が単なるソ連への帰還拒否から、反共産主義へと拡大し、その活動の拠点もまた拡散していったことは自然な流れでもあったといえよう。西ドイツの首都はボンで

(35) Журавлев, Общественная мысль Русского зарубежья, С. 165–166.

(36) 第二次世界大戦前後のソ連出身のテュルク系亡命者については、Department of State Washington DC Office of External Research, Lowell Bezanis, *Soviet Muslim Emigres in the Republic of Turkey* (Washington, D.C.: U.S. Dept. of States, 1992).

(37) 同研究所については、O'Connell, "The Munich Institute for the Study of the USSR," p. 1.

(38) Ibid., p. 2.

(39) Ibid., p. 4.

(40) Ian Johnson, *A Mosque in Munich: Nazis, the CIA, and the Rise of the Muslim Brotherhood in the West* (Boston: Houghton Mifflin Harcourt, 2011), pp. 36–43. 元をたどれば共にCIAが関与しているのだが、ラジオ・フリー・ヨーロッパがソ連支配下のチェコスロヴァキア、ハンガリー、ポーランドなど東欧諸国を対象としていたのに対して、ラジオ・リバティはソ連そのものをターゲットとした。両者とも「ロシアの諸民族解放のためのアメリカ委員会(American Committee for the Liberation of the Peoples of Russia, ACLPR)、別名「ボリシェヴィズムからの解放のためのアメリカ委員会(American Committee for Liberation from Bolshevism, AMCOMLIB)」が運営した。

あったものの、この新たな政治的文脈におけるミュンヘンの重要性も見過ごすことはできないだろう。

以上、インタビュー対象者のエレナが過ごしたミュンヘンの難民キャンプにおける状況から、次のような論点が生まれる。第一に、アメリカに管理されたミュンヘンの難民キャンプでの生活が、彼女の将来への見通しやソ連に対する見方にどのような影響を与えたのか。第二に、カルムイク系亡命二世としての自己認識や、その後のカルムイク民族主義運動、ロシア人難民やロシア民族主義との距離はいかなるものであったのか。最後に、戦中および戦後のドイツとの関係を彼女はどのように考えていたのかである。続く節ではこれらの点について、彼女自身の語り(あるいは、語られないもの)と照らし合わせて考察していきたい。

## 2 インタビュー：エレナ・シュルター (1931年ベルギー生まれ)

### 2.1 語られない歴史

アメリカに亡命したカルムイク人がヨーロッパ時代について長く黙して語ることがなかったのには、無理からぬ理由がある。1943年12月28日、まだ戦争が続く中、ソ連のカルムイク自治ソヴィエト社会主義共和国のカルムイク人—健康な成人男性は従軍中だったので、老人や女性、子供や病弱者がほとんどだった—は、突如強制的に集められ、シベリア・中央アジアへ、離れ離れに移住させられた。スターリンによる命令だった。極めて劣悪な環境下で移送され、移住者の約半数が犠牲になった<sup>(41)</sup>。戦争が終了すると、ソ連のために戦い抜いたカルムイク人兵士たちも、シベリア・中央アジアへと送られた。1956年のスターリン批判後に名誉回復されるが、この13年間は、民族の未来を破壊するのに十分だった。強制移住の記憶は今もなお深く、強烈に刻印されている。彼らの罪状は「通敵行為」だった。亡命カルムイク人がドイツ軍へ参加したに加え、ヴォルガ河を越えスターリングラードの裏手に回ろうとするドイツ軍によって、首都エリスタを含むカルムイク草原の西側半分が占領され、その際、占領下のカルムイク人の一部がドイツ軍に(能動的だったのか受動的だったのか不明だが)呼応したことが問題視されたと言われる<sup>(42)</sup>。

戦後欧米社会において、ナチス・ドイツの協力者であったことを告白することは、長ら

(41) 犠牲者の数については、数え方の違いから諸説あり。Konstantin N. Maksimov, *Kalmykia in Russia's past and present national policies and administrative system* (Anna Yastrzhemska, Trans.) (Budapest: Central European University Press, 2008) (Original work published 2002), pp. 309–310.

(42) チェチェン人やイングーシ人、カラチャイ人、バルカル人、クリミア・タタール人、ヴォルガ・ドイツ人など、多くの民族が同様の強制移住の措置を受けた。東部戦線と各民族の関係については、以下の著作を参考にされたい。Joachim Hoffmann, *Deutsche und Kalmyken: 1942 bis 1945*, 4. Aufl. (Freiburg im Breisgau: Rombach, 1986); Joachim Hoffmann, *Kaukasien 1942/43. Das deutsche Heer und die Orientvölker der Sowjetunion* (Freiburg im Breisgau: Rombach, 1991).

く忌避されてきた(あるいは今でもそうである)。そのうえ、政治思想の違いによって袂を分かったとはいえ、同じ民族の悲劇の遠因を作り出したことは、アメリカに渡った後も、亡命カルムイク人にとって、心の澱として厚く積もっていったに違いない。

1931年生まれのエレーナにとって、第二次世界大戦中と戦後すぐは、まさに青春真っ只中であつた。父サランや従伯父ダルジャを始め、周囲の大人たちはドイツへの協力の道を突き進んでいったが<sup>(43)</sup>、彼女自身は友人と遊び、バレーボールに興じ(インタビュー時、85歳を超えて現役のバレーボーラーだった)、勉学に勤しんでいた。多くの苦しみと悲しみがあつただろうことは想像されるが、そのことについてはあまり語ろうとしない。ただし、当時若いというより、幼かつたという点において、エレーナは、口をつぐむその他の亡命カルムイク人とは異なる<sup>(44)</sup>。エレーナへの聞き取りは、戦後70年以上が過ぎたこと、彼女が当時幼かつたことなどが重なり、実現したといえよう。

## 2.2 自身のこと、父のこと

(資料A) 1931年、ベルギー・リエージュで、私は生まれた。カルムイク名は、ドルマという。父はサランといい、カルムイク人の亡命者だった。母はフランス人だったが、まだ赤ん坊のときに両親は分かれた。あとになっていろいろ調べたが、母の行方については分からなかった。父方の祖父はダンバ。ダンバの兄弟一兄だったか弟だったかは、忘れた一、つまり

(43) 指導的なカルムイク亡命知識人として挙げられるのは、シャンバ・バリノフ、サンジ・バルニコフ、バドマ・ウラノフ、ダルジャ・レミリョーフ、エレンジェン・ハラダワン、サンジ・バヤノフなどである。カルムイク人のなかには氏族があり、最初の4人はプザウ族(ドン・カルムイク人)、ハラダワンはデルベド族、バヤノフはトルグード族だった。エレーナによれば、彼らの政治指向こそはバラバラだったが、亡命先で互いに助け合っていたという。バヤノフは哲学博士で「いつも難解な話をしていた」と、エレーナは回想している。ハラダワンはロシア帝国末期に活躍した医学博士であり、ロシアの立憲民主党(カデット)に所属していた。ちなみに、1929年にベオグラードで出版されたハラダワンの著作『軍指導者チングス・カンとその遺産』は、エレンジン・ハラ・ダワン著、本間七郎訳『成吉思汗傳』満鉄社員会、1936年として邦訳がある。

(44) 例えば、同じ亡命二世でも、9歳年上のアラシュ・ボルマンジノフ(ボルマンシノフ)とは異なる。ボルマンジノフは1922年12月5日、ベオグラードに生まれた。亡命ロシア人貴族が設立した陸軍幼年学校で学び、その後ベルリンやミュンヘンの大学で高等教育を受けた。戦後はミュンヘンの難民キャンプで、カルムイク人や旧ロシア帝国からの亡命者のための社会教育・文化事業に積極的に関わった。1951年、アメリカ連邦議会がカルムイク人移民の受け入れ許可を決議したことを受けて、ボルマンジノフもアメリカに移住した。1958年にペンシルバニア大学で、論文「イリリア運動とセルビア・クロアチア文語形成」によって博士号を取得し、プリンストン大学で専門のスラヴ語学について研究し教鞭をとることになった。同時にアメリカン・カルムイク人文化運動やアメリカのモンゴル学会の発展にも大きな貢献を行った。長くカルムイク文化活動に貢献したボルマンジノフだったが、彼自身がナチス・ドイツの「協力者」だったことは説明してこなかった。例えば、次の著作でも、ドイツ時代のことは明示されていない。Arash Bormanshinov, "The Kalmyk in America, 1952-1962," *Journal of the Central Asian Society*, No. 50, 1963, Part 2, pp. 149-151. 残念ながら2011年に亡くなり、聞き取りを行うことができなかったが、我々が生前にインタビューしても、エレーナのように応じてくれなかったかもしれない。インタビューを試みたグチノヴァも、「協力者」時代のことは十分に聞けなかったようである(Гучинова, Улица "Kalmuk Road.")。

私のおおじはイヴァン。イヴァンの子がダルジャ・レミリョーフ、つまり、ダルジャと父サランは、従兄弟同士だった。ダンバとイヴァンの父は、パリシク。パリシクの父は、エレンジェン。パリシクは、このエレンジェンから(「アルメニア人の」という意味の)エルメーフの姓を名乗り、それが転じて、レミリョーフという姓が引き継がれることになった。それで私は、イエレーナ・サラノヴァ・レミリョーフ。40代で一度結婚し、シュルター姓となった。その後離婚したが、ドイツでは、エレナ・シュルターを名乗っている。

エレナの父、サラン・ダンボヴィチ・レミリョーフ(1894-1944)は、優秀なコサック(カザーク)将校で、巧みな騎手だった。サランは、ロシア帝国ドン軍州サル管区ポタポフスカヤ村(バルドラ・エムグ<sup>(45)</sup>)の、裕福な馬牧場の家族に生まれた。サランの父は、カルムイク語の通訳で、村長や村学校名誉視学の職も務めた人物だった。サランは、近隣アンドレーエフスカヤ村の小学校から、サル管区を中心都市ヴェリカクニャジェスカヤの都市学校に入り、国民学校教師の資格を得た。カルムイク人が多く住む、ベリャエフスカヤ村(ベリャビン・エムグ)の教師になったが、1年で仕事を辞め、家業を継いだ。受け継いだ事業の中でも、特に馬の飼養を好んだ。1915年初め、第一次世界大戦に召集された。作戦軍志願二等兵として、第39ドン・コサック連隊に入り、勲功を挙げた。1916年初め、連隊からノヴォチェルカスク・コサック軍事学校に派遣され、1916年夏に卒業した。その後、第2ドン管区ニジニチルスカヤ村の第5ドン・コサック予備部隊の下士官に任命された<sup>(46)</sup>。1917年に二月革命が起きると、故郷のポタポフスカヤ村は、村の利益を守る保護者として、サランを村長に迎えた。十月革命が起き、ドン軍州にボリシェヴィキの攻勢が迫ると、行軍アタマンП.Х.ポポフの「ステップ部隊Степный отряд」に参加し、重要な作戦課題を担当した。1918年5月から、コンスタンチノフスカヤ村で組織された「ジュンガル連隊」というカルムイク人部隊に加わり、第3部隊長として、ボリシェヴィキとの戦闘で活躍した。一時負傷のために戦列を離れたが、1919年2月、サランは、再びジュンガル連隊に参加し、第4部隊長となった。しかし、最終的に、白軍はクリミア半島まで追い込まれた。ロシア海軍の100隻を超える船で、12万人の人々が脱出したが、乗船人数には限界があり、ロシア人ですら難しかった。ましてやカルムイク人は「二級市民」扱いであり、クリミア半島には1万人もの白軍側のカルムイク人がいたが、多くのカルムイク人は脱出を諦めざるを得なかった<sup>(47)</sup>。

(45) モンゴル語の аймаг の音声が変わったもので、ドン・コサック社会では村落の行政区分を指し、ロシア語では сотня の語が当てられる。

(46) Елена Ремилева, Ойрат-Монголы: обзор истории европейских калмыков. Weiler: Bertugan, 2010, С. 630-631. 同書は、エレナ自身の手によるもので、インタビューの補足情報として利用した。特に亡命一世の活動についてインタビューと重複する内容もあるが、本稿はエレナが著書に載せなかった些細な日常についての語りを重視している。

(47) Ibid., С. 598-599, 631.

(資料B)父サラン・レミリョーフは、ロシア革命・内戦の末に、ドン・コサックとともに祖国を離れた。フランスで、クバン・コサックとともに農場を経営し、一時は300人の労働者を雇っていたが、その後、事業に失敗してしまった。それで1938年、私が7歳の時、父サランは、私を従兄弟のダルジャに預け、どこかへ行ってしまった。

クリミアを船で脱出した後、サランは、コンスタンティノープル近郊カバジャの収容所に入り、その後、ブルガリアへ渡った。労働者として働くとともに、彼はコサックの乗馬技術(ジギト)の公演を披露するようになった。その当時、コサックの馬乗り曲芸は、ヨーロッパで物珍しく、ブルガリアでの公演を自信に、パリ進出を図った。1925年初め、クバン・コサック将校5名とともに、パリで「コサック六人衆」を名乗った。1925年5月初旬、パリに隣接する都市モンルージュの2万席を数える大きな競馬場スタッド・バッファローで、「コサック六人衆」を中心に、ドン、クバン、テレク・コサック250騎による公演を成功させた。新聞各紙はこぞって、記事、広告、写真を掲載し、評判になった。コサック乗馬公演は、毎日1回、祝日には2回行われた。1か月後には、パリのシャン・ド・マルス公園で演じることになった。一座はフランス中を巡業した。冬は公演せず、休養、馬の訓練、人員の選抜や補充に充てた。エレナの証言で言うところの「農場」とは、このコサック公演団のことを指すと考えられる。サランは、さらに事業に力を注ぎ、経営者、トレーナー、座長をこなした。スペイン、ポルトガル、フランス、イギリス、ベルギー、スイスなど、ヨーロッパ中を廻った<sup>(48)</sup>。こうして父サランは、困窮する亡命生活の弥縫策としてコサックとの興行活動を選び、そのなかでフランス人女性とのあいだに娘エレナが誕生した。しかし、亡命ロシア人の生活は安定したものではなかった。

### 2.3 従伯父ダルジャに引き取られ、欧州を流浪する

エレナの父サランの従兄弟、ダルジャ・イヴァノヴィチ・レミリョーフ(1892-1957)は、学校教師でありドン・コサックの将校であるとともに、カルムイク民族運動の活動家で、亡命カルムイクの若者のための社会活動を行った人物である。ダルジャは、戦後のアメリカ亡命においても重要な役割を担った。父子家庭に育ったエレナは、父サランが事業のため家を出ると、ダルジャと妻サムソナの世話になった。

(資料C)ダルジャ夫妻のあいだには子供がいなかったので<sup>(49)</sup>、我が娘のように可愛がってくれた。ダルジャの妻サムソナは、カルムイク人亡命指導者の一人シャンバ・バリノフ<sup>(50)</sup>の

(48) Ibid., C. 631.

(49) 夫ダルジャ、妻サムソナは、どちらも革命と内戦の中で伴侶を失い、亡命後にソフィアで再婚した。ちなみに、ダルジャの名をドルジャとする研究も一部見受けられるが、本人が編集した文献でもダルジャと表記され、エレナもインタビューでダルジャと呼んでいたため、本稿でもダルジャとする。

(50) シャンバ・バリノフ(Шамба Нюделич Бабинов, 1894-1959)は、ドン・カルムイク出身の政治家・社会活動

妹だった。それでバリノフも、私のことをよく気にかけてくれた。ダルジャはソフィアにいたが、その後、ベオグラードに移った。ダルジャに付いて、私もベオグラードで暮らし始めた。ベオグラードにはカルムイク人子弟が5人しかいなかったが、ロシア系の陸軍幼年学校やギムナジウムもあった。単科大学も9つあり、不自由はまったくなかった。ロシア正教会も仏教寺院もあった。ベオグラードにいたのは1941年まで。最後のころには、食べ物も少なく苦しかった。ダルジャは、「カルムイク文化労働者委員会(KKKP)」<sup>(51)</sup>の活動のために、プラハに移動した。オーストリアとの国境を越えるときには、1日に2～3家族ずつしか通過できずに、とても苦勞した。

ダルジャは、1892年、エレナ之父で従兄弟のサランと同じ、ポタポフスカヤ村の裕福な馬牧廠、イヴァン・レミリョーフの家に生まれた。若くして、ダルジャは、国民学校の教師となるとともに、カルムイク社会活動家としても活動した。ロシア内戦に参加したダルジャは負傷し、リヨン号でまずチュニスに送られ、治療後に、ブルガリアに送られた<sup>(52)</sup>。

ブルガリアで、ダルジャは学齢期の子どもを集め、ヴェリコ・タルノヴォ地方のカピノヴォ聖ニコラ修道院にあったロシア中等農業学校に入れさせた。そこでダルジャも教師になり、カルムイクの生徒のために仏教道徳を教えた。資金不足によって、ブルガリアのロシア学校を維持することは難しく、1923年春に学校は解散させられた。しかし、チェコスロヴァキア政府の啓蒙的関心<sup>(53)</sup>と、カルムイク社会活動家バドマ・ウラノフ<sup>(54)</sup>の尽力で、

---

家で、カルムイク民族主義のイデオログとして活躍した。独ソ戦ではドイツ軍に参加し、ドン・ステップでソ連のカルムイク逃亡兵をドイツ軍に引き入れた。1956年にアメリカに移住し、カルムイク文化活動に従事した。Гучинова, Улица “Kalmuk Road,” C. 41, 51–56, 120–125.

(51) 亡命カルムイク人の諸団体(プラハの「カルムイク文化労働者委員会」やベルリンの「カルムイク人協議会」等)の組織・活動内容については、ほとんど解明されていない。2.1で述べたように、亡命カルムイク人の対独協力は、ソ連国内のカルムイク人を強制移住させることになった要因のひとつと考えられ、アメリカに亡命したカルムイク人も、ソ連・ロシア連邦のカルムイク人も、1930–40年代の亡命カルムイク人の活動について語ることを長らく忌避してきた。近年、その時期の彼らの動向は徐々に注目を集めつつあり、筆者も別稿で明らかにする予定である。

(52) ダルジャはカザン軍事学校を修了し、ドン連隊の将校として勤務した。1918年初め、П.Х.ポポフ將軍の「ステップ部隊」に参加し、そのあと、ジュンガル連隊に入隊し、内戦を戦った。Ремилева, Ойрат-Монголы, С. 629.

(53) チェコスロヴァキア大統領マサリクは、ポリシェヴィキ政権崩壊後にロシアでの活躍が期待される若者の教育に力を注いだ。1919年にはすでに、亡命者子弟教育のための組織が誕生し、手厚い支援が行われた。Andreyev and Savický, *Russia Abroad*, pp. 44–51; 諫早勇一「同化と共生：中東欧諸国における亡命ロシア文化序説」『言語文化』第9巻第1号、2006年、100–101頁; Chinyeva, *Russians outside Russia*, pp. 39–68, 125–130.

(54) バドマ・ウラノフ(Уланов, Бадма Наронович, 1880–1969)は、ドン・カルムイク出身の文化人で、エレンジェン・ハラダワンらとともに、帝政期から活躍した。亡命後は、ベオグラードの仏教寺院建設、プラハでの「カルムイク文化労働者委員会」の組織、多くのカルムイクやコサックの雑誌を発行するなど、文化活動に貢献した。1956年にアメリカに移った。Гучинова, Улица “Kalmuk Road”, C. 30, 41–46.

ダルジャは、カルムイクの生徒を連れてプラハに移った。生徒はプラハのロシア・ギムナジウムに入り、ダルジャ自身も教師になった。ダルジャに引き取られたエレーナも、プラハで暮らした。10年にわたって、ダルジャは、チェコスロヴァキア共和国カルムイク文化労働者委員会の雑誌「オラン・ザラタ」の編集者を務めた。委員会の役目は、カルムイクの若者を様々な学校に集めることだけでなく、より広範な民族文化的な課題だった。だが、亡命ロシア人への充実した支援策で有名だったチェコスロヴァキアも、1927年5月から、カルムイク委員会の補助金については削減を開始した<sup>(55)</sup>。

1936年、ダルジャは人員削減のあおりを受けてプラハを離れ、エレーナを連れて、セルビアのベオグラードに移った。ベオグラードにはカルムイク人の大きな共同体があり、仏教寺院(1929年)も建立されていた<sup>(56)</sup>。ダルジャは、建築資材を手配する事業を行い、カルムイク人のための社会活動も継続した。しかし、ドイツ軍がバルカンへ接近するとともに、失業者が増え、ベオグラードの人びとは飢え始めた。ダルジャと家族は、1941年にプラハに移り、その後ベルリンのカルムイク民族委員会で1943年から1945年初めまで働いた<sup>(57)</sup>。

インタビューで、エレーナは父のことについて多くを語らなかつた。父サランがドイツのケルンにいたとき、戦争が始まり、サランは、ボリシェヴィキとの闘いのために、1942年3月、セルビアのロシア防衛兵団に義勇兵として登録した。2か月勤務したが、股関節炎症から股関節結核になり、長く病床に伏さざるを得なかつた。そのあいだも、いずれ健康を取り戻し、「祖国の抑圧者」との闘いに参加するという願いを持っていたが、叶わなかつた。1944年6月26日午後4時、サランは、セルビア・パンチェヴォのロシア人病院で亡くなった。従兄のダルジャが葬儀を執り行い、ベオグラードの仏教寺院で、カルムイク式の供養を行った。そこに娘エレーナもいた<sup>(58)</sup>。

## 2.4 戦時中のギムナジウム

(資料D) 1943年4月、(叔父の義兄である)バリノフは、物資に恵まれているベルリンに、ダルジャや私を呼んでくれた。しかし、ベルリンにはロシア語学校がなかつたので、私は、1943年秋にダルジャのもとを離れ、別のカルムイク亡命指導者バドマ・ウラノフを頼り、プラハに戻った。プラハには、ウラノフがつくったカルムイク人孤児院もあった。プラハのロシア語学校は、プラハ・ゼムゴルと呼ばれていた。ゼムゴルというのは「ゼムストヴォ・都市労働者」のことで、ゼムゴル学校は、亡命ロシア人の旧都市富裕層の寄付金によって運営されていた。最初の亡命ゼムゴル学校は、1921年にコンスタンティノーブルで設立された。ゼ

(55) Ремилева, Ойрат-Монголы, С. 629.

(56) Andreyev and Savický, *Russia abroad*, pp. 177–183.

(57) Ремилева, Ойрат-Монголы, С. 629. 委員会の仕事の傍ら、製紙工場でも働いていたようである。

(58) Ремилева, Ойрат-Монголы, С. 631. ダルジャ・レミリョーフは、サランの追悼記事を、ベルリン発行のカルムイク人雑誌『ハリマグ』(1944年7月号、11頁)に寄稿した。優秀な騎手として、勇壮な騎乗姿の写真が掲載されている。記事では、6月27日に死去とある。Даржа Ремилев, “Брат о брате,” Хальмаг, № 3 (15), С. 11–12.



ムゴル学校は戦争末期まで続いた。これらは寄宿学校で、生徒にはロシア人、カザーク、ベラルーシ人がいた。ウクライナ人、ザポロージェ・コザックは別の学校だった。

ギムナジウム生活は1942-44年のことで、私自身はロシア改革実科ギムナジウムに在籍していた。その頃は、まだプラハに爆撃がなかったので、比較的自由に過ごした。プラハのカルムイク人ソルナ・バクブシェフの妻は、ズデーナというチェコ人女性だった。ソルナ自身はコサック会議(クルーグ)で忙しかったが、ズデーナは、とてもよくしてくれた。彼らの娘はトランプが得意で、よく一緒に遊んだ。ズデーナとは、戦後もときどき会った。1944年のクリスマス休暇で、ベルリンのダルジャのもとに遊びに行き、そのあとプラハに戻ったが、ソ連軍の接近によって、すでに学校は閉鎖されていた。この学校の校長は、ロシア人(リガナという名前)だったが、このとき逮捕されてしまった。そのため、再びベルリンのダルジャのもとに身を寄せた。

## 2. 5「アメリカ・ゾーン」

(資料E) 1945年1月中旬になると、ベルリンの空襲も激しくなった。「カルムイク人協議会」<sup>(59)</sup>のバリノフは、ベルリンのカルムイク人のために、ドイツ南部へ疎開する特別列車を手配した。私たちの列車は、イエーナ、ニュルンベルクを通過して、ミュンヘン東駅に着いた。最初にバイエルン州ショーンガウの難民収容所、そのあと、ホーエンフルヒという小さな町の収容所に移動した。そこには、小さな収容所がすでにたくさんあった。IRO (注1)による施設だった。収容所には西欧からの人々がいた。彼らはオランダ人やフランス人で、わずかだがイタリア人もいた。彼らが戦争捕虜だったのかは分からない。45年2月から4月に、戦闘機が収容所周辺に時々飛来することがあったが空襲に遭うことはなかった。しかし食べ物はなかった。45年5月に解放されるとすぐに、フランス人とオランダ人は帰国した。イタリア人は残った。収容所にはセルビア人、ブルガリア人、カルムイク人がいた。ショーンガウには、離れ離れになった人々の集合ポストがあった。東部戦線から離脱したカルムイク人兵士が、カルムイク人が収容された噂を聞きつけ、ドイツ軍の制服のまま収容所に潜り込んだ。戦中、ポーランドにはドイツ軍のカルムイク人騎兵軍団があり、そこからの兵士たちだった。1945年6月、ダルジャもミュンヘンに来た。バイエルン州は、アメリカ占領地区に入った。アメリカ軍はたくさん食べ物をくれた。私たちはミュンヘンの北にあるフライマンの収容所に移された<sup>(60)</sup>。

アメリカ占領地区に入ったカルムイク人は、約800人を数えた。1945年から1947年までは、UNNRA (国連救済復興会議)から援助を受けた。1948年からは、IRO (国際救済復興会議)の援助のもとに、収容所生活が送られた。難民がDPとして支援を受けた時代は1951年に公式に終了し、以降「置き場のない人々」は「国を持たない外国人」という扱いに変わった。1950年代を通して徐々に、IROは収容所の統廃合を進め、DPのキャンプの運営も最

(59) 注51参照。

(60) グチノヴァは、ダルジャたちが収容された収容所を一貫してシュライスハイムとするが(Гучинова, Улица “Kalmuk Road,” C. 145.)、エレナ証言は収容状況に紆余曲折があったことを示す。

最終的にドイツに移された<sup>(61)</sup>。

## 2.6 収容所という青春時代

(資料F) フライマン時代は、私の青春だった。フライマンの収容所には、チェコ人、セルビア人、ラトヴィア人、ポーランド人、ウクライナ人、ガリツィア人などから成る8,000人が暮らしていた。フライマンには、もちろんギムナジウムがあった。ウンラー (UNRRA) は、大学もフライマンに作った。フライマンのギムナジウムでは、ロシア語、英語、ドイツ語、教会スラヴ語、ラテン語が必須言語として教えられた。フランス語を選択することも可能だったが、私はやらなかった。フライマンはコスモポリタンな環境にあり、ヨーロッパ各地で教鞭をとっていた教授なども収容され、非常に知的環境に恵まれていた。この収容所には、各民族のクラブがあり活動が盛んだった。国別にサッカーチームもあり、カルムイク人チームが一番強かった。ただし人数が足りなく、キーパーはロシア人だった。セルビア人チームも「白い鷲」と畏れられ、非常に強かった。ダンスや映画、ポーカーも楽しかった思い出。バレーボールなど、スポーツにも興じた。

フライマン収容所では、ロシア人団体による新聞は、影響力が強すぎるとして発行が許されなかった。しかし、カルムイク人の新聞のみは、発行が許されていた。このカルムイク人新聞『評論 Обозрение』の実質の発行者は、ベルリンで活躍したバリノフだった。バリノフは、最初こそ牢獄に入れられたが、すぐに釈放された。彼がドイツ協力者だったということもあり、別のカルムイク人を名目の発行者にした。実は、少なからずのロシア人がカルムイク人の名前を偽って、ひそかにこのカルムイク人新聞に寄稿していた。

## 2.7 「置き場のない人々」の失われる居場所

(資料G) 1946～47年頃、いくつかのカルムイク人家族は、リェージュの炭鉱に去った。シュライスハイムには100のバラックがあり、ロシア人、ウクライナ人、ベラルーシ人、ガリツィア人が混住していた。しかし、ロシア人とウクライナ人の仲があまりに悪いので、ウクライナ人をフライマンに、ロシア人をシュライスハイムに集める措置が取られた。その結果、私たちカルムイク人も、ロシア人と一緒にシュライスハイムに移された。シュライスハイムの近郊のフュッセンには、たくさんのソ連人がいた。彼らはソ連兵として独ソ戦を戦ったものの、ソ連への帰還を拒んだ人々だった。あまり世に知られていないが、あるソ連軍カザーク部隊が、戦後イタリアに留まることを望み、その後イギリス軍駐留下のオーストリアでソ連側に強制送還されてしまうという悲劇的な事件もあった<sup>(62)</sup>。シュライスハイムなどの難民収容所は、1952年末、米軍撤退に伴って解体された。さらに、ヨーロッパ各地から帰還したドイツ避難民の収容によって、私たちカルムイク人の居場所はなくなってしまった。

ダルジャは、1945年初めまで、ドイツのカルムイク民族委員会で働き、エレナのイン

(61) 荒井『「三度で最後の大陸」にいたるまで』、447頁; Holian, *Between National Socialism and Soviet Communism*, pp. 268–269; *Джаб Наминов-Бурхинов, Борьба за гражданские права калмыцкого народа*. Москва: Джангар, 1997, С. 112.

(62) Anton Schleha, *Iwan und die Lienz-Kosaken* (Badenweiler: ZAR TV GmbH, 2011).

タビューにあるように、6月にはミュンヘンにいた。その秋から、ダルジャは、再びカルムイクの若者を集め、フライマン収容所のロシア・ギムナジウムで、教育者となった。それと同時に、移住の問題に取り組み始めた。だが、17か国がカルムイク人の受け入れを拒否した。そこでアメリカ政府に打診することになった。1946年、アメリカへの移住支援のため、カルムイク民族ドイツ代表部が組織され、ダルジャが全会一致で、代表部のメンバーに選ばれ、代表部事務総長になった。ダルジャは、アメリカ市民の宣誓供述書をもって、1950年4月、ミュンヘンのアメリカ領事館に「ソヴィエト割当移民ヴィザ」の取得に向かった。

アメリカ領事館は、1940年の国籍法第303条をもとに、ダルジャ夫妻のヴィザ申請を拒否した<sup>(63)</sup>。国籍法は、非白人の帰化を禁止していたからである。しかし、このヴィザ申請は、アメリカ移民局や司法省で3度審議され、最終的に合衆国司法長官ハーバード・ブラウネルの決裁に委ねられるほど、紛糾した案件となった。1924年の移民法によって、アメリカは移民の制限を行い、数量的な制限のみならず、移民の出身地、地域、個人的資質を選抜するようになった。ダルジャ夫妻は、白人ではないという理由から、帰化不適切と判断された。しかし、ダルジャは移民局の判断にひるむことなく、上訴を繰り返した。

上訴審理でまず注目されたのが、血統である。ダルジャは祖母がどちらもロシア人で、父方の祖父はアルメニア人の血統を持つため、その25%を白人の血として認定可能だが、カルムイク人の血統が優勢であるとして「白人ではない」と判断された。しかし、続くさらに詳しい議論のなかで、当時、アフガン人、アラブ人、アルメニア人、シリア人に対して、裁判所が国籍法第303条にもとづき「帰化適格」とする判決を下したことが考慮され、タタール人の存在が俎上に載せられた。つまり、「ヨーロッパ・ロシアのタタール人」は、何世紀もヨーロッパ・ロシアに住み、「文明化」し、歴史的関係や通婚によって部分的に吸収または同化し、「東部ロシアの人びとの多くに吸収され、血においても慣習においても多かれ少なかれヨーロッパ化」した「白人の一員、いわゆるヨーロッパ人種」と判断できるとされた。そのタタール人は「地理的、民族的、歴史的にカルムイク人に近い」ため、カルムイク人は起源としてはアジアだが、何世代も続いてきた教育、文化活動、ロシア・ソヴィエトの支配を考慮すれば、「白人、いわゆるヨーロッパ人種である」と最終的に結論付けられたのである<sup>(64)</sup>。

(63) 荒井は、1924年の移民法によって、「アジア系」に分類された人々は移住を事実上禁じられることになったとし、「この移民法の制限が解かれるのは1965年のこと」と指摘する。荒井『『三度で最後の大陸』にいたるまで』、447頁。

(64) *Administrative decisions Under Immigration & Nationality Laws. United States Department of Justice. Volume 4. February 1950 to January 1953*, pp. 275–286. ちなみに、ダルジャは、高血圧のため身体的にも「欠陥」があるとして、1917年の条項によって「帰化不適格」とされたが、単なる肉体労働者ではなく外国語教師として働き、適切な健康診断書を提出するという条件によって、入国が許可された。

その結果、1951年7月28日、司法長官ブラウネルの最終決裁によって、ダルジャとサムソナの渡米は許可された。かくして、ダルジャ夫妻への許可は、その他のカルムイク人難民のアメリカ移住をもたらした<sup>(65)</sup>。

(資料H) こうして、1952年、亡命カルムイク人は、今度はアメリカに亡命することになった。アメリカまでは、軍艦に乗って、2週間だった。多くのカルムイク人が入植したニュージャージー州ハウウェル<sup>(66)</sup>ではなく、私は、隣のペンシルバニア州フィラデルフィア<sup>(67)</sup>に住むことになった。その後、アメリカ国民として十数年間を過ごし、1964年に西ドイツに渡った。まず、デュッセルドルフで2、3年働き、その後、ミュンヘンに來た。たまたまロシア語、ドイツ語、英語を使えるので、ラジオ・フリー・ヨーロッパに誘われ、そこの記録調査部に務めることになった。このときの同僚たちとは、今でも、毎月食事を開いていて、実は、今日もその会の日だった。お金を貯めて終の棲家も買い、現在は、アメリカとドイツの年金をもらって過ごす年金生活者。

## おわりに

ミュンヘンの難民キャンプを取り巻く環境を確認した際に浮上した論点(本稿第1節)を、改めてエレナの語りと照らし合わせてみたい。

第一に、アメリカに管理されたミュンヘンの難民キャンプでの生活は、彼女の将来への見通しやソ連に対する見方にどのような影響を与えたのか。

エレナによれば「フライマンはコスモポリタンな環境」であり、そこで彼女がUNRRAのギムナジウムで英語を含む多言語を習得したことは、それ以前にブルガリア、セルビア、チェコ、ドイツといった地でヨーロッパ諸言語に親しんでいたとはいえ、ドイツを離れアメリカでキャリアを進めるのに大きく役立ったことは間違いない(資料F)。またドイツ帰国後には、ラジオ・フリー・ヨーロッパという国際的機関で職を得たことにも繋がった、と彼女自身が語っている。エレナは、ソ連に対する見解を直接的に語りはしなかった。しかし、現在のロシア連邦カルムイク共和国の人々について、ソ連の影響で「本来のカルムイク人」の姿から大きく変わってしまったと述べ、否定的な態度を見せた<sup>(68)</sup>。

(65) この件について、荒井は、ブルヒノフの著作(1997)にもとづきブルヒノフの主導性を論じている(荒井『『三度で最後の大陸』にいたるまで』、126頁)が、エレナはそれを否定し、亡命二世の若いブルヒノフより、ダルジャ・レミリョーフやバドマ・ウラノフら亡命一世がアメリカ亡命を主導したと、インタビューで指摘した。グチノヴァも、ダルジャへの移民許可の重要性を指摘する。Гучинова, Улица “Kalmuk Road,” C. 144-149.

(66) ニュージャージー州ハウウェルのカルムイク人入植地の様子は、映画「ジュンガリア出身のアメリカ人」(Norman Mackie, *Americans from Jungaria*. Released by Princeton Seminars, 1965)として映像で見ることができる。

(67) エレナが移住したペンシルバニア州フィラデルフィアは、現在のロシア連邦カルムイク共和国の仏教指導者エルデニ・オンパディコフ(チベットの聖人ティローパの転生ラマ)の生まれ故郷でもある。井上岳彦「新仏教聖地建設の夢：カルムイク人の仏教復興と民族文化復興のあいだ」杉本良男、松尾瑞徳編著『聖地のポリティクス：ユーラシア地域大国の比較から』風響社、2019年、187-212頁。

(68) 父や叔父など周囲の大人が反ポリシェヴィキ活動を行い、戦後エレナ自身も西側の放送局に在籍した身としては、語るまでもない自明のことだったのかもしれない。

第二に、エレナはカルムイク系としての自己認識やカルムイク民族主義運動とどのように相対したのか。また、ロシア人難民やロシア民族主義との距離はいかなるものであったのか。

先行研究が指摘してきたように、一部の難民はミュンヘンのキャンプで政治的団体を組織する機会を得て、自らの主張を発信するようになった。だが、エレナにとって、そこはスポーツやサークルなどの場であり、ロシア人とは別個のカルムイク人としての民族的区分を付与され、亡命二世である彼女がカルムイク人としての自己認識を強化させられた場でもあった(本稿2.5および資料E)。戦後、ロシア人難民が次々に新天地へと旅立つ中、収容所に取り残されたカルムイク人は、アジアとヨーロッパの境界に位置する自らの存在を問うたに違いない。

また、ロシア人との関係に目を向ければ、カルムイク人・チームにロシア人が加わっていたこと、さらには、関係の悪いロシア人とウクライナ人の収容所を分ける措置が採られた際にカルムイク人がロシア人と同じキャンプに集められたというエピソードからは、ロシア人との友好的な関係をうかがい知ることができる(資料G)。キャンプ内におけるロシア人団体の影響力を削ぐためにロシア語新聞の発行が許されず、少なからずのロシア人がカルムイク人の新聞に寄稿していたことが事実ならば、両者の関係は、少数者であるカルムイク人が影響力を持つ多数派ロシア人の庇護に入るのではなく、ドイツ人との関係を含め、微妙な舵取りを行いながら生き抜いてきたカルムイク人に、ロシア人側がむしろ依存していた可能性も否めない。同時に、収容所管理者側がロシア人との仲介役としてカルムイク人を利用していたことも推測できよう。

第三に、戦中および戦後のドイツとの関係を彼女はどのように考えていたのかである。

これもまた、エレナが語らなかったテーマである。従叔父ダルジャやその他の多くのカルムイク系亡命ロシア人もドイツに協力した。そうしたドイツへの協力によってこそ、エレナ自身も教育や移動などの各種サービスを享受することができたはずである。しかし、父サランは「独ソ戦」の準備のなかで没し、この戦争において、カルムイク人はドイツ側とソ連側の双方に分かれて戦い合うことになった(本稿2-3)。だが、双方に分かれていたからこそ、戦中・戦後のどさくさに紛れてミュンヘンの難民キャンプに潜り込み、生き永らえたソ連出身のカルムイク人もいた。ドイツ・ソ連双方の想像を絶する蛮行も後に知っただろう。複数の言語や多くの国の事情を熟知していることを強調し、常に「コスモポリタン」であろうとするエレナの姿は、運命に翻弄されながらも時代時代を懸命に生き、カルムイク人としての気概と矜持を保ち続けたことを表している。

だが、彼女の語りに見られる各所との距離感やバランスの正体は一体何なのか。キャンプではロシア人と比較的「友好的」な関係を築いていたカルムイク人であった。しかし、アジア系である彼女らはロシア人よりも渡米が遅れた一方で、母親がフランス人であった彼

女自身はアメリカのカルムイク人コミュニティで疎外感を抱いていた。その後、エレナがミュンヘンに戻ってきたことは、我々に一つの示唆を与える。1964年に彼女はミュンヘンのラジオ・リバティで働き始めた。文献調査・文書管理の部署で、仕事では英語だけでなくロシア語とドイツ語も使用した(資料H)。当時のことを生き生きと、そして力強く語る彼女からは、難民として、そして10代の若者として過ごしたミュンヘンでもう一度「ゼロ」からの再スタートを切ろうとしていた姿が伝わってきた。彼女はそのままミュンヘンに住み続けると言う。

本稿は、ミュンヘン難民収容所を美化しようとするものではない。そこでの多様な人々の境遇は決して一般化することができないものである。たしかに、「本国に送還できないDPs」は、東西対立のなかでの戦後処理として政治的に創出されたとも言える存在であった。だが、エレナという個人の語りから浮かび上がるのは、ミュンヘンの収容所が、ヨーロッパを転々とした無国籍者の拠り所になったのみならず、戦前までの亡命者内のしがらみや、祖国を持つ者と持たない者の境界から一時的にでも解放された場であったということだ。収容所から旅立ち、その後、白人とそれ以外の人種のあいだの溝、カルムイク人内部の政治的対立に直面したエレナにとって、「置き場のない人々」として過ごしたミュンヘンこそが、彼女の居場所になったのだろう。

謝辞 本研究は、エレナ・シュルター氏の全面的協力によって、成立したものである。また、匿名の2名の査読者からは有益な意見をいただいた。ここに記し感謝を申し上げます。



ミュンヘンの自宅にて(2017年2月26日)  
出典：筆者撮影